

共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築—民俗語彙の体系的比較にもとづいて—」(2022年度第2回研究会)

2022年12月3日(土曜日)13時半より19時、ハイブリッド開催

本共同研究課題最終年度、第2回目となる研究会では、発表3件と、発表に関する質疑応答・情報提供、共同研究の活動に関する報告と成果論集についての相談・議論を行った。当日のプログラムは以下のようである。

発表1

ナムタルジャ/南太加 (AA研共同研究員、青海民族大学)  
「チベット牧畜民の骨利用とそこからみえる文化の諸相」  
質疑応答

発表2

三浦順子 (AA研共同研究員、翻訳家)  
「ニンマ派におけるベジタリアン思想の流れ —ニヤラ・ペマ・ドウンドゥルとパトウル・リンポチエ」  
質疑応答

発表3

ジャムヤン (東京外国語大学大学院博士後期課程)  
「チベット高原における家畜の管理法と土地利用法について」  
質疑応答

4 全員 論集に関する打ち合わせ

ナムタルジャ発表では、発表者自身が昨年より青海省やチベット自治区にて調査を進めている、家畜の骨の多角的な利用が紹介された。テントのジョイントや留め具、搾乳桶の留め具、犬を追い払う道具、哺乳瓶、嗅ぎタバコ入れ、さじ、数珠、指輪、おはじき、食器、薬、占い道具など、チベット高原に居住する人々の衣食住、そして宗教活動などあらゆる場面で骨が利用されていることが示された。また、近年では、ヤクの骨の栄養成分に注目が集まり、現地の都市部で骨スープを提供する店が増えているという。質疑では、なぜ、他の骨ではなく肩甲骨の骨が占いに利用されるのかという質問が出たが、平たくて文字が書けることと、一般によい骨だとされているためと回答があった。左右の肩甲骨どちらも使用され

るそうである。また、膠にして仏画や弓矢に、針、ボタンなどにも利用されるのではないかという追加情報があった。

三浦発表では、チベットの僧院においてここ数十年間で進んだ菜食主義について、発表者自身の観察が述べられ、1991年に自らベジタリアンとなったアジャ・リンポチエの先駆的な事例が周囲に影響を与えた例が示された。また、チベット人を菜食主義に踏み切らせたことに大きな影響をもつと考えられる『クンサン・ラマの教え』から肉食の罪深さについて説かれた一節の翻訳が紹介された。ベジタリアン思想についてチベット内でも、栄養学など様々な立場から議論があるという情報が提供された。

ジャムヤン発表では、前半で、世界各地の放牧モデルのうち、東アフリカ・モデル、イヌイト・モデルが紹介され、後半では、それらと照らし合わせて、青海省チベット地区の伝統的な放牧の特徴が述べられた。その要点を以下に示す。

- ・東北チベットの伝統的な移動牧畜の家畜の管理法と土地利用は生態学的に合理的であること
- ・1950年代までは、部落共有制・共同管理体制であったため、村人、地域住民、寺院等を通して牧草地を管理していたこと
- ・東北チベットの移動牧畜は制度・政策に大きく左右されてきたため、今後、代々継承されてきた放牧の知識と技術を、新たな牧畜形態で活かしていく力が求められていること

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.